

「パパの育児休業体験記」のあらまし

「育児休業を取りたい」「仕事と同様に家庭でもしっかりと役割を果たしたい」と考えている男性を後押しするとともに、そういった男性を取り巻く職場や家族の意識を変えていくことを目的として、育休を取得した又は取得中の先輩パパたちの育児休業体験記（以下、体験記と略します）を公表しました。

84 編の体験記では、

- ・職場が体制を整えて育休取得を応援してくれた、
- ・ママの気持ちを初めて理解することができた、
- ・子育てを通じて家族との絆を深められた など

さまざまなエピソードが語られているほか、これから育休を取得しようとしているパパたちや家族、職場などに向けたアドバイスなども含まれています。

この体験記を、これから育児休業を取りたいと考えている男性（パパ）ばかりではなく、パパと一緒に子育てをしていきたいと思う女性（ママ）にも、是非、読んで、活用していただきたいと思います。

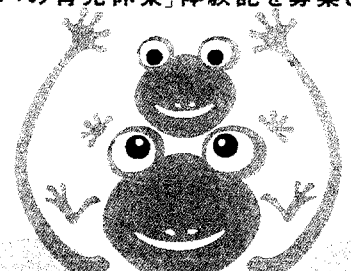
また、孫の誕生を控えている‘じいじ’や‘ばあば’、そしてパパと一緒に働く人たちなど、パパとママを取り巻くあらゆる人たちにも、この体験記を読んでいただき、新しい家族とともに歩みだそうとしているパパとママを力強く応援していただきたいと思います。

この「パパの育児休業体験記」（概要版）では、育児休業の取得申請から職場復帰後までの5つのパートに分けて、先輩パパたちのエピソードやアドバイスなどを掲載しています。ここでは、84 編すべてを紹介しきれませんが、「仕事と生活の調和ポータルサイト (<http://www8.cao.go.jp/wlb/index.html>)」には 84 編すべての体験記を掲載していますので、是非、ご覧ください。

〔参考〕募集概要

- 対象者 育児休業を取得した、または、育児休業中の男性
- 募集期間 平成20年9月2日～10月17日
- 応募方法 郵送、ファクシミリ、インターネット

「パパの育児休業」体験記を募集します!



育児休業の取組を通じて感じた、職場への思いなどを、お寄せください!
皆さんの体験を広く発信することで、職場での「仕事と子育てを両立したい」と
考える男性の増加に貢献します!

募集対象者

- 育児休業を取得した、または、育児休業中の男性
- 育児休業の取得申請から職場復帰後までの5つのパートに分けて、先輩パパたちのエピソードやアドバイスなどを掲載しています。
- この体験記を、これから育児休業を取りたいと考えている男性（パパ）ばかりではなく、パパと一緒に子育てをしていきたいと思う女性（ママ）にも、是非、読んで、活用していただきたい。
- また、孫の誕生を控えている‘じいじ’や‘ばあば’、そしてパパと一緒に働く人たちなど、パパとママを取り巻くあらゆる人たちにも、この体験記を読んでいただき、新しい家族とともに歩みだそうとしているパパとママを力強く応援していただきたい。

募集期間

平成20年9月2日～10月17日


応募方法

郵送、ファクシミリ、インターネット

その他

- 原則一人1編、500文字以内で記載してください。
- 体験記の採用権は内閣府にあります。
- 応募された方にはお礼状の発行をいたします。
- 応募された方の個人情報は、本誌と本誌のポータルサイト (<http://www8.cao.go.jp/wlb/index.html>) に掲載させていただきます。

連絡先: 内閣府 仕事と生活の調和推進室 男性の育児休業体験記担当 電話:03-3561-9269



パパの育児休業体験記に寄せて



80 通を超える育児休業体験記が内閣府に寄せられたことは、男性の育児休業が社会的に広がってきていることを示していると思います。もちろん、育児参加の有無は、決して育児休業の取得の有無だけで計れるものではありません。男性の育児休業取得率の相変わらずの低さにもかかわらず、街で見かける赤ちゃん連れのお父さんたちの姿は確実に増えているのを感じています。

体験記の中にも指摘されていましたが、育児休業の取得の難しさもありますが、育児休業のあとに、連綿と続く長い育児生活を、いかに仕事と両立させていくか、ということのほうが、難しい点も多いと思います。

女性の 7 割が第一子出産後に仕事をやめています。そして、仕事と育児の両立の難しさをその理由としてあげている人が多いのは、現実の厳しさを物語っているのでしょう。

私自身も、1 歳にならない双子を保育園に預けて職場復帰をしたときには、自分のキャリア継続に苦勞していました。それでも、第三子の誕生をきっかけとして、夫が一年間の育児休業を取得し、その間 3 人の育児を主体的に行ってくれた結果、仕事継続の困難さはずいぶん軽減されました。

現在は、夫も職場復帰をし、夫婦双方が、仕事と育児の両立を協力しながら行っています。そうした中で感じるのは、双子の育児責任を一人で負いながら、仕事と両立していた時期と、夫とその責任を分担しながら、3 人を育てている今との相違です。

第三子出産前の夫は、自分の都合のよいときにだけ子どもを見でくれるという「育児のお手伝い」でした。最後は、「俺には仕事がある」という言葉で逃げ切られてしまいます。「君が休めないのか」「誰か他の人に頼んでくれよ」といわれることはあっても、「俺が何とかする」とは言いませんでした。

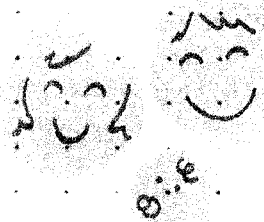
夫も「育児」をしている今は、私の負担と責任は、半減どころか、精神的には 10 分の 1 ぐらいになりました。夫が「育児」をするようになったきっかけは、育児休業取得です。子育てを自分で 100% 行うことにより、自分のかつての「育児のお手伝い」が、いかに「育児」と呼べないかということを痛感したようです。



妻が働いている場合に、夫が育児責任を共有することは、妻の仕事との両立を格段に容易にしたいと思います。常に、子どもに何かあったら、自分が仕事を休むあるいは辞めるという選択肢しかないのに比べて、場合によっては夫に頼めるということであれば、妻は仕事を続けやすくなります。

また、妻の職業の有無にかかわらず、子どもを育てるという責任の重みは、一人で負うには重過ぎます。そして、同時に、日々成長していくわが子のいとしさを妻に独占させるのはもったいなさ過ぎます。体験記の中にもありましたが、育児休業を取った皆さんはそれに気がついています。

男性の育児休業の取得は、夫婦がともに子どもを育てるという選択をするきっかけとなるように思います。もちろん、家庭のあり方、子育ての方針は、それぞれの家族で納得して決めていくことです。それでも、育児休業の取得を阻む要因が大きければ、家族の選択は達成できません。体験記の中でも、職場の理解や周囲の環境による後押しが、取得の決断につながったというコメントがあるように、おそらく、その逆に、取りたくても、周囲の反対で取れなかったという人たちも多くいらっしゃるのでしょう。仕事と生活の調和、男性の育児休業取得促進に向けて、社会全体で取り組んでいくことは、非常に重要だと思います。



育休パパの妻として

西垣 淳子

西垣 淳子氏 略歴

平成 3年 通商産業省（現経済産業省）入省

以後、生物化学産業課課長補佐、大臣官房地方課課長補佐、産業組織課課長補佐等を歴任

平成 14年 男女の双子を出産、1年間の育児休業を取得

平成 15年 世界平和研究所 主任研究員。会長である中曽根康弘元首相のもと憲法改正案作りに取り組む。

平成 16年 男児を出産し、翌月に復帰。

（氏の夫である山田正人氏※が1年間の育児休業を取得
※「経産省の山田課長補佐ただいま育休中」の著者）

平成 20年 経済産業研究所上席研究員

1 育休を後押しする周囲の理解と環境

取得をためらう気持ちを後押しする温かい力。育児休業を取得しやすい環境とは？そのような環境づくりのために必要な取組とは？

- 職場が、育児休業について理解があり、前向き
- 会社が、育児休業制度などについて周知するほか、社員の育児を支援する制度を設ける
- 育児休業取得経験者が、自分の経験を伝えていく
- 事例紹介など、国や自治体による企業を後押しする取組が必要
- 父親も参加しやすい育児教室など、男性の育児を社会全体で応援する取組が必要

先輩育休
パパから

- 「同じ子を持つ親として大賛成だ」上司の一言が後押し。

職場が気持ちよく育休に送り出してくれた

育休の取得には、まず職場の理解が不可欠です。私は育休取得の約一年前に、直属の上司に育休取得の意思を伝えました。その折に上司が「同じ子を持つ親として大賛成だ」と言ってくれたことが大変有難かったです。上司の了解を得た後に、私はその意図を職場のパートナー達にも伝え、一年間をかけて日常業務の中で引継ぎを行いました。育休の取得には、職場からのプレッシャーがあると耳にしますが、私の場合は、職場が気持ちよく育休に送り出してくれました。

- 職場復帰前の研修の実施などがあれば、育休からの復帰もスムーズ

育児休業が終わり、職場に復帰して挨拶をしたときに、皆から「おかえり、お疲れ様。」と言われたときは、とても嬉しかったことを思い出します。

私がいなくて、皆で仕事をフォローしてくれ、とても大変だったにもかかわらず、優しい言葉をかけていただき、とても感謝しました。その後は、感謝の気持ちと育休分を取り戻すため、精一杯仕事を頑張りました。

- 会社の制度と環境が仕事と家庭の両立を後押し

有給扱いの育児休業制度があると妻に報告したら、「わが社にはそういう制度があるんだ」と感心すると同時に、気持ちの変化もありました。後ろめたさを感じながら休みをとるという気持ちから、「有給扱い育児休業制度」があることで、堂々と休んでいいんだという気持ちに変わりました。(略)

出産をサポートできる制度及び仕事と家庭が両立できる環境を会社が整えていること、またそれを奨励してくれることにも妻も喜んでいます。

1-02

「私の1年間の育児体験」

岩川幸二さん

- ①公務員
- ②1,000～4,999人
- ③30代後半
- ④1年間

1-06

「パパ、頑張れ」

小島昌樹さん

- ①信用金庫職員
支店長代理
- ③30代前半
- ④1週間

1-08

1-08

「育児休業制度等仕事と家庭を両立できる環境に感謝！」

鹿田寛記さん

- ①会社員
- ②300～999人
- ③30代後半
- ④1か月間